

## 研究ノート

# 関連する概念との関係から見た博物館の展示と展示解説についての研究レビュー

栢場美帆<sup>†</sup>

<sup>†</sup> 東京大学大学院教育学研究科

本論文は、博物館の展示を扱うこれまでの研究と、展示解説を扱うこれまでの研究のレビューである。本論文の目的は、日本語で書かれた文献について、①博物館の展示や展示解説がどのような視点から研究されているかを整理すること、②展示（または展示解説）と例えば来館者のような他の概念との関係を整理することの2点である。まず、博物館の展示を扱う研究について、研究の視点によって大きく分けて3つ、細かく分けると合計8つの類型に分けた。類型化した上でそれぞれの研究を見てみると、展示と来館者の関係に焦点を当てた研究が多いことがわかった。次に、展示解説を扱う研究については、博物館の展示を扱う研究で見られた概念の関係を当てはめることができ、展示物の種類によらず、展示と来館者の関係に焦点を当てたものが多いことがわかった。最後に、レビュー全体を通し、展示物と展示解説の関係に焦点を当てた研究は見当たらないことがわかった。

キーワード：博物館，展示，展示解説，レビュー

## 目次

### 1 はじめに

### 2 展示を扱う研究の類型

- 2.1 実際に存在する展示を対象とした研究について
- 2.2 展示一般についての研究について

### 3 展示を扱う研究に現れる概念の關係の整理

- 3.1 展示と来館者・博物館職員の關係
  - 3.1.1 展示と来館者の關係
  - 3.1.2 博物館職員と展示の關係
  - 3.1.3 来館者と博物館職員の關係
- 3.2 展示物・展示解説と来館者・博物館職員の關係
  - 3.2.1 展示物と来館者の關係
  - 3.2.2 展示解説と来館者の關係
  - 3.2.3 博物館職員と展示物・展示解説の關係
  - 3.2.4 展示物と展示解説の關係

### 4 展示解説についての研究の類型

- 4.1 美術館の展示解説を扱う研究について
- 4.2 博物館の展示解説を扱う研究について

### 5 展示解説を扱う研究に現れる概念の關係の整理

- 5.1 展示解説と来館者の關係
- 5.2 博物館職員と展示解説の關係
- 5.3 展示物と展示解説の關係

### 6 まとめと今後の課題

#### 1 はじめに

本論文は、博物館の展示を扱うこれまでの研究と、展示解説を扱うこれまでの研究のレビューである。本論文では、まず、博物館の展示を扱うこれまでの研究（教科書等も含む）のレビューを行い、その後、展示解説を扱うこれまでの研究のレビューを行う。

一口に博物館の展示を扱った研究や展示解説を扱った研究といっても、様々な視点での研究があることが考えられるが、既存の博物館の展示を扱った研究や展示解説を扱った研究のレビューは管見

の限り存在しない<sup>1</sup>。このレビューの目的は、これまでなされてきた研究では、展示や展示解説というものが、どのような視点から研究されているのか、それらの研究の中で展示とそれを取り巻くものの関係を見たとき、どのような関係が扱われ、どのように表現されているのかを、主に日本語と日本語に訳された文献から明らかにすることである。日本語の文献に絞った理由は、ひとまず、日本における展示や展示解説の研究の状況を把握するためである。日本語に訳された文献は必ずしも日本における展示や展示解説を扱っているわけではないが、それらの文献が、日本における展示や展示解説の研究において、日本語に訳されるほどの重要性を持つもの（日本における展示や展示解説の研究に影響を与えるもの）と捉え、検索結果から除くことをしなかった。

筆者の最大の関心は、博物館の展示解説にある。展示解説とは、“展示を紹介・解説するもの”である（『博物館学事典』(p. 230)）。博物館は、情報を得る場である。博物館を訪れる人々は、モノを見ることを通してモノからさまざまな情報（色や大きさ、形など）を得ている。しかし、モノを見ただけで得られる情報以外の情報（発掘年や所有者、そのモノの重要性など）は、言語を通さずに得ることはできない。言語を用いて行われる展示解説というものは、モノ（展示物）が中心の博物館において、モノを見ただけで得られる情報以外の情報を得るために重要な役割を果たしている。しかし、展示解説は、その重要性を認識されていても、来館者や展示物ほどには注目されていない<sup>2</sup>。

展示解説は、博物館の展示の構成要素のひとつである（第3章で詳述）。そのため、博物館の展示についてどのような研究がなされてきたかをレビューし、その知見をもとにして博物館の展示解説についての研究をレビューすることによって、研究対象としての博物館の展示解説について、博物館の展示についての研究との関係から、明らかになっている箇所とそうでない箇所を明確にすることを試みた。

本論文で扱った文献について、まず、第2章及び第3章で扱う論文は、CiNiiと、TREE<sup>3</sup>を用いて収集した。具体的には、検索キーワードとして「博物館」または「ミュージアム」、そして「展示」を用い、展示図録や特定の博物館の展示の紹介が

含まれないように「企画展」や「特別展」といったキーワードを含む文献を検索対象から除くようにした。次に、第4章及び第5章で扱う論文は、CiNiiを用いて収集した<sup>4</sup>。具体的には、論文タイトルに「展示解説」を含み、かつ、「図録」がキーワードとして現れないもののうち、タイトルから明らかにある特定の博物館の展示についての解説ではないと判断できるものを収集した。

展示解説を扱う論文を別に収集した理由は、第2章及び第3章で扱う論文が、あくまで「博物館」あるいは「ミュージアム」がキーワードとして現れている研究であり、「博物館」や「ミュージアム」ではなく「美術館」をキーワードとしている研究を収集することができておらず、館種の違いを無視して展示解説を扱う研究についてレビューを行うことができないからである。ここまで、特に断りなく使用してきた「博物館」という言葉は、本来、村田麻里子が指摘するところの“モノを蒐集し、そのコレクションを保管し、公開することで社会に貢献する公共施設”であり<sup>5</sup>、美術館や動物園なども含まれる広い概念である。この広い概念としての博物館を念頭においていたため、博物館の展示についての研究を収集する際には、美術館など、広義の博物館の下位概念に位置付けられるものをキーワードとして含めなかった。しかし、現実には、芸術品を中心に扱う博物館には「美術館」という別の名称が与えられており、「博物館」という言葉は、例えば国立科学博物館のように、芸術品以外のものを中心に扱う博物館（狭義の博物館）のみを指すことが多い。また、展示について、館によって作り方は異なるものの、展示物や展示解説など、展示を構成する要素はどの博物館でもある程度共通しており、それらの構成要素が組み合わさったものが展示であるという点でも共通した認識がある。そのため、広義の博物館に存在するものとして、ある程度扱う展示物の違いや館の方針を無視した一般的なものとして論じることができる。一方、展示解説は、扱う展示物の違いや館の方針の違いが強く反映されるものであり、構成要素やその組み合わせについて、展示ほどには共通の認識がない。そのため、広義の博物館に存在するものとして一般化して論じることが難しい。例えば、狭義の博物館では情報が多く提供される傾向があるが、美術館では狭義の博物館ほど多くの情

報は提供されない傾向にある<sup>6</sup>。例えば、同じティラノサウルスの化石についての解説であっても、国立科学博物館と福井県立恐竜博物館では、書かれる情報の内容や形式に違いがある。以上を踏まえ、広義の博物館における展示解説について、それを扱う研究を館種を超えて十分収集し、レビューを行うためには「博物館」というキーワードに加えて「美術館」というキーワードを含める必要があると判断した。

本研究では、半永久的に存在する物（言語でないもの）を扱う施設で行われている展示と、それについて解説するもの（展示解説）が、既存研究の中で、何との、どのような関係において扱われているかを知るために、動物園や水族館など、生物を展示する施設で、広義の博物館に含まれるものを含めなかった。加えて、生物を展示する施設における展示解説の位置付けが、狭義の博物館と美術館の展示解説の位置付けと異なることも、これらの施設を扱わない理由として挙げられる。例えば本田公夫は“動物園の解説のデザインはミュージアム（筆者註：狭義の博物館と美術館のこと）とはまた異なるが、この事実は洋の東西を問わず十分考慮されていない。”と述べている<sup>7</sup>。中村元は水族館について、“近年 [中略]、解説を不可欠の情報とする考えは改められつつあり、水槽の展示に関する解説は少なくなるか種名板だけのものが主流となってきた。”と述べている<sup>8</sup>。このような主張は、これらの施設が物ではなく生物を展示していることから来していると考えられる。また、資料館や文学館など、博物館や美術館という名称を持たないが博物館や美術館と同様に（生物ではなく）物を展示する（広義の博物館である）施設については、このような施設の名称を余さず挙げるのが困難であり、また、同じように物を展示する「博物館」と「美術館」を検索キーワードにすることでカバーできると判断し、検索キーワードには含めなかった。

本論文では、博物館という言葉は、基本的には広義の方で用いる。しかし、第4章と第5章では、当該博物館で展示するものの違いを無視できないため、博物館という言葉は狭義の方で用いる。

## 2 展示を扱う研究の類型

展示を扱う研究の中には、博物館展示論を学ぶ人々や実際に展示制作を手掛ける人々のために書かれた、いわゆる手引きや教科書と呼ばれるような文献がいくつか存在する。これらの文献では展示の理論的な側面と実践的な側面の両方を扱うが、筆者自身の考えよりも展示というものが一般的にどのようなものであるかを述べるのが中心である。この種の文献としては、例えばDean<sup>9</sup>や里見<sup>10</sup>のように、歴史や理論、実践面など展示について広く扱うものもあれば、Fergusonら<sup>11</sup>や木下<sup>12</sup>のように、展示の制作の方に焦点を当てた（実際に展示制作を手掛ける人々が読み、活用することを想定した）文献が挙げられる。このように、展示制作のノウハウや、展示について一般的な考え方を紹介するものを「類型0」とする。

類型0に当てはまる文献以外で、展示を扱ってきたこれまでの研究をしてみる。これらの研究を、研究する際の視点に応じて、次の2種類に大きく分けた。

類型1 実際に存在する展示を対象とした研究

類型2 展示一般についての研究

先取りして述べると、展示と来館者の関係を扱う研究を見たとき、類型1-1に属する研究は、展示を見る来館者という視点から研究を行っており、類型1-2に属する研究は、来館者に情報を伝える展示という視点で研究を行っている。以下、2.1節で実際に存在する展示を対象とした研究を、2.2節で展示一般についての研究を見ていく。

### 2.1 実際に存在する展示を対象とした研究について

まずは、実際に存在する展示を対象とした研究について見ていく。加藤<sup>13</sup>のように単なる展示の紹介にとどまるものを除いて、実際に存在する展示を対象とした研究をさらに、以下の3種類に分類した。

類型1-1 特定の展示に関わる実践報告

類型1-2 展示の活用に関する調査

類型1-3 来館者の行動に関する調査

類型1-1の特定の展示に関わる実践報告では、展示制作に関するものが多く見られた。例えば、

山中は、国立民族学博物館の展示解説を多言語化する上で、どのような点に注意し、どのような工夫をどのような考えのもとで行ったのかを述べている<sup>14</sup>。三橋は、展示でモノとして見せることが難しい生態系という概念をどのように展示するかについて、事例を交えて考察している<sup>15</sup>。展示制作に関する他の研究では、データベースの作成に関するもの<sup>16</sup>や展示技術の開発に関するもの<sup>17</sup>などが見られた。特定の展示を対象としなければ、展示技術の開発に関する研究もある<sup>18</sup>。複数の、特定の展示に関わる実践報告をまとめたものとしては、中小路ら<sup>19</sup>や町田<sup>20</sup>が見られた。

類型1-2の展示の活用に関する調査とは、特定の展示を何かしらの目的のもとに活用するために行われた調査である。例えば今田は、国立民族学博物館の展示を対象とした学習プログラムを開発するための調査を行なっている<sup>21</sup>。学習という目的以外にも、観光利用の観点から展示を研究したものもある<sup>22</sup><sup>23</sup>。

類型1-3の来館者の行動に関する調査とは、特定の展示の中で来館者がどのような行動をとっているかを調査するものである。この調査で得られた来館者の姿を、より効果的な展示が行えるような計画を立てることなどに生かす。この種の研究には加野と松本<sup>24</sup>や増田ら<sup>25</sup>などがある。

## 2.2 展示一般についての研究について

次に、展示一般についての研究について見ていく。これを以下の4種類に分類した。

類型2-1 展示についての理論・思想

類型2-2 展示が表現することの考察

類型2-3 展示の動向の研究

類型2-4 他の研究分野と展示の関係についての研究

類型2-1の展示についての理論・思想では、様々な研究が見られる。例えば、村田は、メディア論の観点から、歴史的に、博物館が社会にとってどのような存在であった/であるかを論じている<sup>26</sup>。メディア論の観点から展示について論じたものとしては光岡のものがある。この研究では、ミュージアムにおけるコミュニケーションや双方向性なるものが、ラジオやテレビ、その他デジタ

ル技術など、メディアとの関係の中でどのように見られ、論じられてきたのかを歴史的に追い、そして、ミュージアムをメディアコンプレックス（簡単にいうと複数のメディアの複合体）として理解し、その空間性を重視することを提案している<sup>27</sup>。上記で挙げたものは、メディア論の観点から展示の背後にある社会情勢等を分析したものであるが、展示を見る視点はメディア論だけではなく、展示をめぐる理論や思想もそれだけではない。例えば、奥村ら<sup>28</sup>や並木<sup>29</sup>のように、展示をめぐる学習理論についての研究は、本論文で扱わないものも含めて枚挙にいとまがない。展示についての理論・思想を題材とした複数の論考をまとめたものとしてはCrane<sup>30</sup>が挙げられる。

類型2-2の展示が表現することの考察については、例えば小川の研究が挙げられる<sup>31</sup>。この研究では、狩猟採集社会が非文明的なものであるというイメージが博物館の展示によって再生産されていることを指摘している。秋庭は哲学の観点から、展示物が知を伝えるためには何が必要なのかを論じている<sup>32</sup>。また、一般的に展示で表現されるジェンダーについて外国の事例を交えながら考察したトノムラの研究もここに置いて良いだろう<sup>33</sup>。川口らによる書籍では複数の論考が扱われているが、展示が表現することをめぐる論考が中心である<sup>34</sup>。

類型2-3の展示の動向の研究は、展示における電子メディア（映像機器など）の利用の調査が中心である。まだミュージアムにおける電子メディアの使用が一般的ではなかった時期の論文がほとんどで、例えば前田の研究<sup>35</sup>や、石田と松田の研究<sup>36</sup>が挙げられる。

類型2-4の他の研究分野と展示の関係についての研究では、歴史学との関係を論じるものと地理学との関係を論じるものが見られた。前者については湯浅の研究<sup>37</sup>、後者については福田の研究<sup>38</sup>などが挙げられる。

また、展示を中心的に扱った研究ではないために上記の分類に入らないが、展示に関わるものとしてみることができる研究もいくつか見られた。例えば、小池は、東日本大震災後の文化財レスキューの経験を考察しつつ、モノとして直接展示することはできない年中行事を、実際の展示（この研究では住宅の復元展示）の中でどのように表現した

かを述べている<sup>39</sup>。これらは、上記の分類で言えば、類型2-2に近いものといえる。

以上から見られるように、一口に展示を扱った研究といっても、様々な視点から展示が研究されている。本研究では、これらの研究について、それぞれの研究の視点から、大きく3つ、細かく8つに分類した(表1)。第3章では、これらの研究に現れる概念の関係を整理しつつ、それぞれの関係がどの研究(類型)において焦点が当てられているかを見ていく。

### 3 展示を扱う研究に現れる概念の關係の整理

本章では、ここまで扱ってきた博物館の展示を扱うこれまでの研究の内容に基づき、博物館の展示という概念が、展示という概念を取り巻く他の概念とどのような関係にあるのかを整理する。これを論じる前に、「展示」という概念の定義と「展示という概念を取り巻く他の概念」とは何であるかの説明と定義をする必要がある。

まず、展示について、展示は、“作品などを並べて、多くの人に見せること”であると『スーパー大辞林』では述べられている。この定義に従うと、展示は行為である。展示は、博物館において必ず行われていることであるが、例えば「恐竜の展示」といったとき、そこで行われていることは、恐竜の模型や化石を並べることだけではない。個々の展示物について解説した展示解説を用意し、照明を使って展示物を照らすことなど、さまざまなことが行われている。つまり、「恐竜の展示」の中には、展示物だけではなく、展示解説や照明なども存在する。齋藤が指摘するように、展示はさまざまな要素を組み合わせて成り立つメディアである<sup>40</sup>。ここから、本研究では、展示という概念を、物を並べるといった行為ではなく、展示物や展示解説、照明など、さまざまな要素の総体として存在するものとして扱う。本研究ではこのような要素の総体としての展示と、「展示という概念を取り巻く他の概念」との関係の他に、展示の構成要素である「展示物」「展示解説」と、「展示という概念を取り巻く他の概念」との関係についても整理する。この理由については後述する。なお、展示解説には、文字で書かれたもの(キャプションや解

説パネルと呼ばれるもの)や音声で案内するもの(音声ガイドと呼ばれるものや、ボランティア等による口頭の解説)の2種類があるが、本研究では、来館者が、時間や人数等の制約を受けずに情報を受け取ることのできる、文字で書かれたものに限定する。

次に、展示という概念を取り巻く他の概念について、これらは博物館の展示を扱うこれまでの研究を踏まえることなしに、様々なものを想定することができる。例えば、照明や音響は、展示の構成要素として捉えることもできるが、展示物と展示解説を組み合わせられてきているものとしての展示をより良く見せるための道具と捉え、展示という概念を取り巻く他の概念として挙げることもできる。来館者や学芸員のように、博物館の展示に関わる人々も展示という概念を取り巻く他の概念と言える。このように「展示という概念を取り巻く他の概念」はいくつも考えられるが、筆者が収集した博物館の展示を扱うこれまでの研究の内容に基づき、展示に関わる人々に限定する。展示に関わる人々の中には、展示を見る人々と、展示を作る人々がいる。展示を見る人々は、文献ごとに来館者や利用者、学習者など異なる形で呼ばれるが、ここでは「来館者」で統一する。さらに、展示を作る人々も、文献ごとに博物館職員や学芸員と異なる形で呼ばれるが、ここでは「博物館職員」で統一する。

展示にのみ部分概念(展示物と展示解説)を設定した理由は、博物館の展示を扱う研究の中における展示というものの扱いについて、解像度をさらに上げるためである。先ほど、展示というものを、展示物や展示解説、展示物を覆うケースなど、さまざまな要素が組み合わさったものとして扱うと述べた。もちろん、これらの要素の総体としての(抽象的な)展示について論じる研究もあるが、第2章での整理を見れば、博物館の展示を扱う研究の全てが展示をそのように捉えて論じるものであると言えないことは明らかである。展示の構成要素を部分概念として設定することによって、博物館の展示を扱う研究が実際には展示のどの要素に着目しているのかを明らかにできる。このことを通し、一見あらゆる角度から研究されているように見える展示について、実際によく研究されている部分と、実は十分には研究されていない部分

表 1: 展示についての研究の類型

類型	内容
類型 0	展示制作のノウハウや、展示についての一般的な考え方を紹介するもの
類型 1	実際に存在する展示を対象とした研究
類型 1-1	特定の展示に関わる実践報告
類型 1-2	展示の活用に関する調査
類型 1-3	来館者の行動に関する調査
類型 2	展示一般についての研究
類型 2-1	展示についての理論・思想
類型 2-2	展示が表現することの考察
類型 2-3	展示の動向の研究
類型 2-4	他の研究分野と展示の関係についての研究

を明らかにできる。しかし、展示を構成するあらゆる要素について、他の概念との関係を見ていくことは、紙幅の都合上できない。そのため、いくつかの要素に絞って関係を見ることとする。

展示を構成する要素について、齋藤は“展示空間を構成する要素”と“展示情報を構成する要素”の2つに分けている<sup>41</sup>。齋藤によると、展示は“展示を構成する要素（コンポーネント）を効果的に組み合わせることで情報を伝達する空間メディア”であり、展示の“器となり空間を構成する建築物・展示室・展示ケースなどのいわゆるハード面”，すなわち“展示空間を構成する要素”と、“伝達情報を構成する実物資料（筆者註：本論文でいうところの展示物のこと）・解説グラフィック（筆者註：本論文でいうところの展示解説のこと）・模型・映像などのいわゆるソフト面”，すなわち“展示情報を構成する要素”という2つの要素を持っている<sup>42</sup>。齋藤の整理に従えば、展示物や展示解説は来館者に伝える情報を構成する要素で、展示物を覆うケースや展示物を照らす照明は展示を行う場を構成する要素である。第1章でも述べたように、博物館は情報を得る場である。そして、筆者の関心は、展示を構成する要素のうち情報を構成するものにある。そのため、本論文では、展示が伝達する情報を構成する要素に注目し、博物館という施設においてなくてはならない「展示物」と、ほぼ全ての博物館にあり、かつ、展示を見るどの来館者の目にも必ず入る「展示解説」の、2つの構成要素に絞って見ることにした。

「来館者」と「博物館職員」については、展示における展示物と展示解説のように、構成要素を別個に挙げる（例えば、来館者の下位概念として「20代の来館者」を挙げる）ことが、既存の

研究を整理した上で博物館の展示や展示解説という概念と他の概念との関係を見るという本論文の趣旨の上では不要であるため、構成要素を挙げて検討することをしなかった。

以上を踏まえ、本章では、展示というものがどのような関係のもとで論じられてきたのかを明らかにするために、概念の関係の整理を行う。以下、3.1節でまず、展示、来館者、博物館職員の関係を整理し、3.2節で、展示物、展示解説、来館者、博物館職員の関係を整理する。

### 3.1 展示と来館者・博物館職員の関係

#### 3.1.1 展示と来館者の関係

まず、展示と来館者の関係はどのように記述されているだろうか。両者の関係について、来館者は展示を見るという、来館者から展示に向かう矢印を引くことのできる関係と、展示が来館者に情報を与え、来館者は展示から情報を受け取るという、展示から来館者に向かう矢印を引くことのできる関係の、2つの関係が成り立つと考えられる。展示がなくても来館者がなくても博物館は成り立たないため、展示と来館者の関係は注目されて然るべきである。

展示と来館者の関係については、第2章で挙げたどの類型の中にも、それに関わる研究が見られた。例えば光岡（類型2-1）は“来館者と展示空間（筆者註：本論文でいう「展示」のこと）の間でのコミュニケーション”と述べている<sup>43</sup>。展示と来館者の間の関係をコミュニケーションという言葉で表す研究は他に堀池のもの（類型2-1）が挙げられる<sup>44 45</sup>。このような言葉で表される関係は、どちらにも矢印が向く関係として考えたほうが良いだろう。

来館者から展示に向かう矢印を引くことのできる関係を表す言葉としては、例えば山中の研究（類型1-1）における“解釈”という言葉<sup>46</sup>や、三橋弘宗の論文（類型1-1）における“理解”という言葉<sup>47</sup>が挙げられる。来館者が展示を利用して学習を行うプログラムを開発することが目的となっている今田の研究（類型1-2）<sup>48</sup>や、人々が観光目的で博物館を利用するというに着目した落合と中島の研究（類型1-2）<sup>49,50</sup>も、来館者から展示に向かう矢印を引くことのできる関係に着目していると言って良いだろう。また、類型1-3に属する研究は、来館者の行動を研究することによって当該展示の改善などに繋げることを目的としており、来館者から展示に向かう矢印を引くことのできる関係をもとに研究を行なっているといえる。

一方、展示から来館者に向かう矢印を引くことのできる関係を表すものとして、梅棹（類型2-1）が、“情報の伝達”という表現を用いて、博物館における展示と来館者の関係を表現している<sup>51</sup>。秋庭（類型2-2）は、展示物が来館者に知というものを伝えるために必要なものについて論じていることから、展示から来館者に向かう矢印を引くことのできる関係について考察しているといえる<sup>52</sup>。石田と松田（類型2-3）は、当時の展示の状況について、“伝達すべき情報や資料の価値・内容ができるだけビジュアルであり見学者にとってよりわかりやすく現実的である表現の模索や手法の開発が行われたり、観察や実験といった見学者の直接的な体験による手法が大変多く取り入れられるようになってきた。”と述べているが<sup>53</sup>、展示から来館者に向かう矢印を引くことのできる関係に着目していることがわかる。類型2-4に属する研究は、それぞれの学問分野が展示でどのように表現されているかについて論じていることから、強いて言えば展示から来館者に向かう矢印を引くことのできる関係を論じる研究ということが出来るだろう。

上記を踏まえると、展示と来館者の関係について言及のある研究のうち、類型1に属する研究は来館者から展示に向かう矢印を引くことのできる関係をもとに研究を行なっており、類型2に属する研究は展示から来館者に向かう矢印の引くことのできる関係をもとに研究を行なっていることが

わかる。

### 3.1.2 博物館職員と展示の関係

次に、博物館職員と展示の関係について述べる。一般的には作り手と制作物という、博物館職員から展示へと向かう矢印を引くことのできる関係が成り立つ。類型1と類型2に当てはまる研究の中には、博物館職員と展示の関係に関わるものは見られなかった。しかし、いわゆる手引きや教科書と呼ばれるような文献（類型0に分類されるもの）ではこの関係に言及しているものがあつた。例えば里見は、展示を制作することとは、博物館職員が“展示したい考えや思想をモノや情報をもとに立体化する作業であるといえる”と述べている<sup>54</sup>。

### 3.1.3 来館者と博物館職員の関係

最後に、来館者と博物館職員の関係について述べる。現実には両者が直接交流することはほとんどなく、本論文で扱っているこれまでの研究においても、来館者と博物館職員を直接つなぐ矢印を引くことのできる関係について論じるものはなかった。しかし、展示を経由する矢印を引くことのできる関係であれば、いくつか言及している研究を見ることができる。例えば、橋本（類型2-1）は、博物館職員が“意図したメッセージ”を来館者に伝えるという関係を“物（筆者註：本論文でいうところの展示物のこと）を介したコミュニケーション”と表現している<sup>55</sup>。また、里見（類型0）は、展示は博物館職員が調査・研究したことを来館者へ“提示する”と述べている<sup>56</sup>。いずれも、博物館職員から展示を経由して来館者へと向かう矢印を引くことのできる関係である。

## 3.2 展示物・展示解説と来館者・博物館職員の関係

### 3.2.1 展示物と来館者の関係

博物館の主役は展示物であることは論を俟たない。来館者は一般的に、博物館職員や他の来館者と交流することや展示解説を読むことではなく、展示物を見ることを目的に博物館を訪れる。一般的に来館者は展示物を見、展示物は来館者にとって見られる対象である。この両者の関係を表す言葉について、例えば秋庭（類型2-1）は、科学を対象とする博物館の展示物は来館者に対して、“学を背景にし”て“知を伝える”ことを求めている<sup>57</sup>。これは展示物から来館者に向かう矢印を引くこと

のできる関係である。他にも、来館者は展示物の鑑賞を通して“学習”すると表現されたり、展示物を通じて“知的理解をふかめていく”と表現されたりしている（前者は奥村らによる研究（類型2-1）<sup>58</sup>、後者は梅棹の著書（類型2-1）<sup>59</sup>において見ることができる）。これらは来館者から展示物に向かう矢印を引くことのできる関係である。

### 3.2.2 展示解説と来館者の関係

展示解説と来館者の関係について言及した研究も見られる。来館者は展示解説を読み、展示解説は来館者にとって読まれる対象であるが、例えば山中（類型1-1）は、展示解説は来館者に情報を“伝達”し、来館者は展示解説を読んで“理解”すると述べている<sup>60</sup>。前者は展示解説から来館者に向かう矢印を引くことのできる関係であり、後者は来館者から展示解説に向かう矢印を引くことのできる関係である。Fergusonほか（類型0）でも、展示解説と来館者の間を結ぶ矢印を引くことのできる関係が言及されていた<sup>61</sup>。

### 3.2.3 博物館職員と展示物・展示解説の関係

博物館職員と展示物・展示解説の関係については、一般的に博物館職員は展示物を配置し、展示解説を書くという、博物館職員から展示物・展示解説に向かう矢印を引くことのできる関係がある。逆に、展示物・展示解説に向かう矢印を引くことのできる関係は、博物館職員が展示物（展示する資料）について研究するという場合を除き、一般的には想定されない。博物館職員から展示物・展示解説に向かう矢印を引くことのできる関係のうち、博物館職員から展示物に向かう矢印の引くことのできる関係、すなわち、博物館職員がどのように展示物を配置すべきかについては、展示物（展示する資料）の保存にも関わってくるため、類型0に分類される研究において紙幅を割いて言及されている。博物館職員から展示解説に向かう矢印の引くことのできる関係について、Fergusonら（類型0）は、展示解説が来館者のためであることを強調しつつ、展示解説が来館者にとって“より意味のある、理解しやすく、適切なもの”となるように、主題の展開や指示語の使い方などの注意すべき点を事例を交えつつ紹介している<sup>62</sup>。他にも、山中（類型1-1）は“解釈”という言葉を表示解説と博物館職員の関係を表す言葉としても使用している<sup>63</sup>。

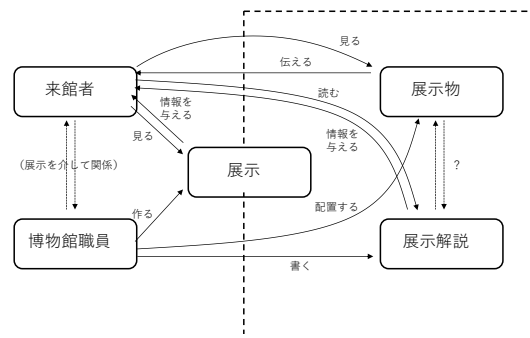


図 1: 概念同士の関係

### 3.2.4 展示物と展示解説の関係

展示物と展示解説の関係について、展示解説が展示物を説明/解説するという、展示解説から展示物に向かう矢印を引くことのできる関係がある。また、展示物が展示解説の内容をある程度固定する（展示解説には、展示や展示物と全く無関係なことを書くことが定義上できない<sup>64</sup>）ことから、展示物から展示解説に向かう矢印の引くことのできる関係も想定できる。木下（類型0）が、タイトル等の情報を見ないで展示物を鑑賞してほしいという特殊なコンセプトの展示を除き、基本的に展示物と展示解説はどちらが欠けても展示として成り立たないと述べているように<sup>65</sup>、展示物と展示解説の間には密接な関係があることに疑いはない。しかし、この関係に着目した研究は、本研究で扱った研究の中には見当たらなかった。

ここまで、博物館の展示という概念が、展示という概念を取り巻く他の概念とどのような関係にあるのかを整理した。まとめると、図1のようになる<sup>66</sup>。

第4章と第5章では展示解説についての研究を扱うことから、図1のうち、展示解説に向かう矢印によって表される関係と展示解説から引かれる矢印によって表される関係が扱われていることが想定できる。第4章と第5章では、展示解説についての研究を整理しつつ、これらの研究がどの関係に着目しているのかを見ていく。

## 4 展示解説についての研究の類型

第2章と第3章で、展示というものを対象にしている研究を整理した。第4章と第5章では、展示解説に焦点を当て、展示解説についての研究に



ついて整理する。

第1章で述べた方法により収集した展示解説についての研究のうち、およそ8割は、展示解説をより良くするために取り組んだ内容を紹介する実践報告（第2章の類型で言えば、類型1-1に近い）であった。本論文では、展示解説に関わる実践報告ではない研究に焦点を当ててレビューを行う。

展示解説というものはどれも、広義の博物館に置かれているものである。そのため、当該博物館で展示するものの種類（芸術品なのか動物の標本なのか、など）によって研究関心の向けられ方に差はないように思われる。しかし、実際の研究を見てみると、芸術品を中心的に扱う博物館（美術館）に置かれた展示解説と、それ以外のものを中心的に扱う博物館（狭義の博物館）に置かれた展示解説は、異なる書き方をするものとして、別のものとして扱われていた。そのため、まとめて「広義の博物館における展示解説を扱う研究」を整理するのではなく、「美術館の展示解説を扱う研究」と「狭義の博物館の展示解説を扱う研究」に分けて、それぞれについて整理することにした。以降、第4章と第5章では博物館という言葉、狭義の博物館を指すものとして用いることにする。

以下、4.1節では美術館の展示解説を扱う研究を、4.2節では博物館の展示解説を扱う研究を見ていく。

#### 4.1 美術館の展示解説を扱う研究について

美術館の展示解説については、吉村が力を入れて研究していることが窺える。例えば彼は、MarkovićとRadonjićが考案した尺度で用いられている“顕在的属性”と“潜在的属性”に注目し、両者が実際に絵画の展示解説の中でどのように現れているかを見る研究を行なっている<sup>67</sup>。この研究を通し、吉村は、美術館の展示解説が、絵画に実際に描かれていること（“顕在的属性”）と展示解説を書く人がそのように読み取ったこと（“潜在的属性”）が明確に区別されないまま書かれていることを指摘し、事実に基づいた解説を提供しつつ来館者の自由な鑑賞を妨げないような展示解説とするために、“顕在的属性”を展示解説に生かすことの意義を説いている。また、吉村は、美術館の展示解説と博物館の展示解説の違いに注目しており、美術館の関係者と博物館の関係者にこの違いについて聞き

取り調査を行なっている<sup>68 69</sup>。吉村は、美術館の展示解説について、博物館の展示解説と比べると遅れており、博物館の展示解説の書き方から学ぶことが多いとしつつも、美術館という館の性質を考慮した上で改善を行なっていくべきであると述べている<sup>70</sup>。

#### 4.2 博物館の展示解説を扱う研究について

博物館の展示解説についての研究の主眼は、どのように展示解説を書けばよいか、という点に置かれている。例えば、有田と関口の研究では、国立科学博物館に設置された展示解説について、実際に関心を高める効果を発揮しているかどうかを検証したり<sup>71</sup>、書き手が想定した伝えたいことが読み手に伝わっているかどうかを検証したりしている<sup>72</sup>。佐々木は、日本文化史の展示について、博物館の利用に不慣れな来館者がますます博物館から遠ざかることを防ぐために、日本文化史の展示解説を日本史的な時代区分と対応づけて書くことなどを提案している<sup>73</sup>。

### 5 展示解説を扱う研究に現れる概念の関係の整理

本章では、ここまで扱ってきた展示解説を扱う研究の内容に基づき、展示解説というものが、来館者などの他の概念とどのような関係にあるのかを整理する。ここでの「来館者などの他の概念」とは、第3章でも用いた「来館者」「博物館職員」「展示物」を指す。なぜなら、第3章では既に、展示解説が関わる関係として、展示解説と来館者、博物館職員と展示解説、展示物と展示解説の3つの関係を挙げており、これらの関係が展示解説を扱う研究においても見られることが期待できるためである。本章での整理を通し、展示解説というものがどのような関係のもとで論じられてきたのかを明らかにする。

なお、第4章と第5章では博物館という言葉は狭義の方で用いているが、第3章に倣い、美術館にいる展示を作る人も、（狭義の）博物館にいる展示を作る人も「博物館職員」とする。

以下、5.1節では展示解説と来館者の関係、5.2節では博物館職員と展示解説の関係、5.3節では展示物と展示解説の関係をそれぞれ整理する。

### 5.1 展示解説と来館者の関係

美術館の展示解説というものは、吉村が指摘するように、例えば絵画であれば制作年などの客観的事実のみが書かれている場合が多い<sup>74</sup>。これを吉村は、来館者が自由に絵画等を鑑賞するための“配慮”としている<sup>75</sup>。ここでは、展示解説が来館者に情報を与える（来館者の鑑賞の妨げにならない程度に情報を提供するにとどめる）という、展示解説から来館者に向かう矢印を引くことのできる関係を見ることができる。また、別の研究では、吉村は“よりよい鑑賞体験と充実感を味わえる”展示解説の作成にも取り組んでいる<sup>76</sup>。ここでも、展示解説から来館者によりよい鑑賞体験と充実感を与えるという、展示解説から来館者に向かう矢印を引くことのできる関係を見出すことができる。

博物館の展示解説を扱う研究を見ても、多くの研究が展示解説から来館者に向かう矢印を引くことのできる関係に焦点を当てて研究を行なっていることが窺える。例えば、有田と関口は、展示解説が来館者の興味関心を高めているかどうかに関心を当てた分析<sup>77</sup>や、展示解説を通して展示解説の書き手が言いたいことが来館者に伝わっているかどうかに関心を当てた分析を行なっている<sup>78</sup>。佐々木は来館者の理解を促進するような展示解説にするために、どのようなことを念頭に置くべきかについて述べている<sup>79</sup>。神戸が展示解説を“展示企画者（筆者註：本論文でいうところの博物館職員）の思想を見学者（筆者註：本論文でいうところの来館者）に伝達する手段である”と述べているように<sup>80</sup>、展示解説は来館者が読むことでその役割を果たすものである。そのため、第3章でいうところの、展示解説から来館者に向かう矢印を引くことのできる関係に焦点を当てて研究を行なっていると考えられる。

また、第4章の冒頭で、筆者が収集した展示解説についての研究の多くが、展示解説をより良くするために取り組んだことを紹介する実践報告である（第2章における類型1-1に近い研究である）と述べ、これらを第4章における類型化に含めなかった。これらの実践報告は、来館者の目線から展示解説を改善していく取り組みについて述べており、第3章でいうところの、来館者から展示解説に向かって矢印の引くことのできる関係を前提に行われているということが出来る。

全体を通し、展示解説と来館者の関係は、第3章で見たように、展示解説から来館者に矢印を引くことのできる関係も、来館者から展示解説に矢印を引くことのできる関係も、どちらも見ることが出来る事が指摘できる。

### 5.2 博物館職員と展示解説の関係

美術館の展示解説についての研究では、吉村が、美術館では、来館者の自由な鑑賞を妨げないよう、展示解説の書き手である博物館職員は、実際にモノに表れていることと自身の考えのどちらを書いているかを意識しながら展示解説を制作するべきであると主張している<sup>81</sup>。ここでは、博物館職員から展示解説に向かう矢印を引くことのできる関係が意識されているといえる。

博物館の展示解説を扱う研究については、有田と関口が、展示解説には展示製作者（博物館職員）の意図が反映されているという前提で、どの程度その意図が伝わっているのかを研究している<sup>82</sup>。ここでも、博物館職員から展示解説に向かう矢印を引くことのできる関係が表れている。

全体を通し、博物館職員と展示解説の関係は、展示解説と来館者の関係ほどは多くないものの、いくつも見ることが出来る事が指摘できる。

### 5.3 展示物と展示解説の関係

第3章では、展示を扱う研究には展示物と展示解説の関係に着目したものが見当たらなかったと述べた。展示解説を扱う研究では、吉村が展示物に実際に現れていることを展示解説に書くことの意味を述べており<sup>83</sup>、展示物と展示解説の関係があることを示唆していた。しかし、この関係に着目した研究は見られなかった。

## 6 まとめと今後の課題

ここまで、博物館の展示についての既存の研究と、展示解説についての既存の研究を概観してきた。第2章では一口に博物館の展示についての研究といっても、さまざまな視点を持っていることを確認した。そして、これらの研究を、大きく分けて3つ、細かく分けて8つの類型に分類した。第3章では、博物館の展示というものが他の概念とどのような関係にあるのかについて、収集した研究をもとに関係を整理し、展示物と展示解説の関係以外は言及されていることを確認した。特に、展示と来館者の関係に焦点を当てた研究が多く、こ

れらについて、類型1に属する研究は来館者から展示に向かう矢印を引くことのできる関係をもとに研究を行っており、類型2に属する研究は展示から来館者に向かう矢印の引くことのできる関係をもとに研究を行なっていることがわかった。第4章では展示解説に焦点を当て、展示解説についての研究を大きく2つに類型化した。第5章では展示解説というものが他の概念とどのような関係にあるのかについて、収集した研究をもとに関係を整理し、第3章で整理した関係が適用できることを確認した。

以上のようなレビューの結果、まず、博物館の展示は、来館者や博物館職員との関係で論じられており、特に来館者との関係で論じられることが多いことがわかった。展示を、その構成要素に分解し、特に展示物と展示解説について見てみると、やはり来館者や博物館職員との関係で論じられていた。しかし、展示の構成要素それぞれの関係、今回で言えば、展示物と展示解説の関係については、先行研究の中では特に扱われていないことがわかった。そして、展示解説は、博物館の展示の構成要素として、その構成要素を直接目の当たりとする来館者や博物館職員といった人々との関係の中でよく論じられて（位置付けられて）おり、人との関係の中でその重要性を訴えられることはあっても、人を介在しないで（展示の構成要素で重要なものの一つである展示物との関係において）位置付けることはこれまでの研究ではなされてこなかったといえる。

博物館は展示を行う場所であり、展示を構成する要素のうち、最も重要なものといえば展示物である。展示解説を最も重要なものとして位置づけることはできない。しかし、先述したように、タイトル等の情報を見ないで展示物を鑑賞してほしいという特殊なコンセプトの展示を除き、基本的に展示物と展示解説はどちらが欠けても展示として成り立たない<sup>84</sup>。Fergusonらが、展示解説について、“博物館からのメッセージを伝達する主要な道具”であると述べているように<sup>85</sup>、展示解説というものは、展示を構成する要素のうち一番重要なものとはいえなくても、欠けてはならない要素である。しかし、本来、展示物というモノと展示解説という（書かれた）情報あるいはメッセージをつなぐものは何もなく、定義上展示解説には展示

物とは無関係ないことを書くことができないとされているのみである。展示物と展示解説の結びつきは自明のもの、つまり、展示物と展示解説の結びつきには既存研究において十分な説明がないままとなっており、この結びつきに焦点を当てる研究は見当たらなかった。展示物と展示解説は、実際の程度結びついているのだろうか。

本論文の冒頭で、筆者の最大の関心は博物館の展示解説にあると述べた。展示物と展示解説の関係、すなわち、展示物と展示解説の結びつきを描き出すことで、展示というものを、これまでとは異なる角度から見るができるようになることに加え、展示物という非文字情報を説明する言葉という役割を担っている展示解説が、どの程度その役割を果たしているのかについても明らかにすることができるだろう。以上のことから、今後の、展示についての研究や展示解説についての研究では、来館者や博物館職員との関係だけでなく、展示物と展示解説など、展示の構成要素同士の関係についても論じていく必要があると考えられる。

#### 〈謝辞〉

本論文は、2022年度修士論文「科学系博物館の展示解説の計量的分析: 国立科学博物館「地球環境の変動と生物の進化 恐竜の謎を探る」の展示と『小学館の図鑑NEO [新版] 恐竜』の解説文を比較して」の2.1節および2.2節の内容に対し、修正・加筆を行ったものである。

#### Notes

- 1) 2021年4月28日に、TREE（後述）において「博物館」（あるいは「ミュージアム」と「展示」を主題に含み、かつ「レビュー」や「研究課題」を主題に含む論文を検索したが、条件を満たす論文が見つからなかった。「レビュー」や「研究課題」ではなく「動向」や「展開」、「理論」を主題に含む論文は見つかったが、その内容は筆者が求める、既存の博物館の展示を扱った研究や展示解説を扱った研究のレビューではなかった。同様の検索を2021年4月29日にCiNiiのフリーワード検索においても行ったが、やはり筆者が求める内容のものは見つからなかった。

- 2) 例えば Google Scholar で「展示物」を検索するとおおよそ 6580 件, 「来館者」を検索するとおおよそ 5730 件がヒットするが, 「展示解説」を検索するとおおよそ 1390 件しかヒットしない (いずれも 2023 年 1 月 13 日時点の検索結果)。
- 3) 東京大学で利用できる学術資料を中心に検索できるサービス。東京大学が所蔵する資料に加え, 東京大学が契約するデータベースもまとめてひとつの検索窓から調べることができる。
- 4) TREE でも検索したが, TREE の検索結果からレビューの対象とならないものを除いていった結果, CiNii で調べたときとの差がなくなってしまった。
- 5) 村田麻里子『思想としてのミュージアム: ものと空間のメディア論』人文書院, 2014, p. 25.
- 6) 吉村浩一, 関口洋美 “UX デザインから捉えた美術館の展示解説 (1) 問題提起と研究計画の設定” 『法政大学文学部紀要』 vol.66, 2013, p. 63-77.
- 7) 本田公夫 “解説サイン” <村田浩一, 成島悦雄, 原久美子 [編] 『動物園学入門』朝倉書店, 2014> p. 135.
- 8) 中村元 “施設⑨水族館: 表現” <日本展示学会 [編] 『展示学事典』丸善出版, 2019> p. 89.
- 9) Dean, David 『美術館・博物館の展示: 理論から実践まで』 [Museum exhibition: Theory and Practice, Routledge, 1996,] 山地秀俊, 山地有喜子, 北里桂一訳, 丸善, 2004.
- 10) 里見親幸 『博物館展示の理論と実践』同成社, 2014.
- 11) Ferguson, Linda et al. 『意味とメッセージ: 博物館展示の言語ガイドライン応用編』 [Meaning and Messages: Language Guidelines for Museum Exhibitions,] 塚田浩恭, 井山哲也訳, リーベル出版, 2002.
- 12) 木下周一 『ミュージアムの学びをデザインする: 展示グラフィック&学習ツール制作読本』ぎょうせい, 2009.
- 13) 加藤秀俊ほか 『アメリカ歴史技術博物館: フロンティアとアメリカの文明』講談社, 1978.
- 14) 山中由里子 “物質文化を「翻訳」する: 国立民族学博物館における展示解説の多言語化実践現場から” 『国立民族学博物館研究報告』 vol.42, no.1, 2017, p. 49-70.
- 15) 三橋弘宗 “生態系の仕組みを展示する (博物館と生態学 (1))” 『日本生態学会誌』 vol.56, no.1, 2006, p. 95-98.
- 16) 日高真吾 “国立民族学博物館「日本の文化展示場」の展示資料をデータベース化する試み” 『民具研究』 vol.157, 2018, p. 67-83.
- 17) 星野浩司ほか “ミュージアム・コンテンツを基盤とする次世代型展示支援システムの研究” 『情報処理学会論文誌』 vol.53, no.2, 2012, p. 911-925.
- 18) 丹羽勇介, 曾我麻佐子 “練供養のジェスチャ認識と仮想試着による展示支援コンテンツの試作” 『映像情報メディア学会技術報告』 vol.37, no.36, 2013, p. 41-42.
- 19) 中小路久美代ほか 『触発するミュージアム: 文化的公共空間の新たな可能性を求めて』あいり出版, 2016.
- 20) 町田小織 [編] 『メディアとしてのミュージアム』春風社, 2021.
- 21) 今田晃一 “国立民族学博物館ハンズ・オン「ものの広場」を活用した学習プログラムの開発と実践 I (理論編): 博物館展示資料への材料からのアプローチ” 『国立民族学博物館調査報告』 vol.56, 2005, p. 83-151.
- 22) 落合知子, 中島金太郎 “陝西省・甘粛省・ウイグル自治区の観光における博物館活用の研究: 中国甘粛省における博物館の現状と観光活用” 『長崎国際大学論叢』 vol.19, 2019, p. 99-110.
- 23) 落合知子, 中島金太郎 “陝西省・甘粛省・ウイグル自治区の観光における博物館活用の研究: 中国陝西省・河南省・河北省における博物館の現状と観光活用” 『長崎国際大学論叢』 vol.20, 2020, p. 33-46.
- 24) 加野隆司, 松本啓俊 “展示方式と鑑賞行動からみた博物館の建築計画に関する研究: 展示レイアウトおよび展示室の形態に関する研究” 『日本建築学会計画系論文報告集』 vol.454, 1993, p. 55-64.
- 25) 増田亜樹ほか “来館者構成からみた町並み再現展示の観覧行動の比較: 大阪市立住まいの

- ミュージアムを対象として”『生活科学研究誌』vol.10, 2011, p. 39-50.
- 26) 村田, *op. cit.*, 2014.
- 27) 光岡寿朗『変貌するミュージアムコミュニケーション: 来館者と展示空間をめぐるメディア論的想像力』せりか書房, 2017.
- 28) 奥村高明ほか“テート美術館「アートへの扉」理論の検討”『日本科学教育学会年会論文集』vol.38, 2014, p. 13-14.
- 29) 並木美砂子“博物館の利用者主体の教育論構築にむけて: 異文化理解を促す学習論の紹介と提案”『国立歴史民俗博物館研究報告』vol.140, 2008, p. 169-183.
- 30) Crane, Susan A. ed 『ミュージアムと記憶: 知識の集積/展示の構造学』[Museums and memory,] 伊藤博明訳, ありな書房, 2009.
- 31) 小川英文“考古学者が提示する狩猟採集社会イメージ”『民族学研究』vol.63, no.2, 1998, p. 192-202.
- 32) 秋庭史典“モノが知識を伝えるには: 博物館展示物の哲学的考察”『Juncture: 超域的日本文化研究』no.3, 2012, p. 100-111.
- 33) トノムラヒトミ“ジェンダー研究と歴史展示の課題”『国立歴史民俗博物館研究報告』vol.219, 2020, p. 429-460
- 34) 川口幸也ほか『ミュージアムの憂鬱: 揺れる展示とコレクション』水声社, 2020.
- 35) 前田義寛“AV ミュージアムの新時代(2) 博物館・資料館における AV システムの導入と活用動向: 映像展示による新しい体感スペースの誕生”『博物館研究』vol.24, no.8, 1989, p. 14.
- 36) 石田康, 松田有司“最近の博物館の動向: 展示施設におけるマルチメディア技術の適用”『情報管理』vol.40, no.7, 1997, p. 596-604.
- 37) 湯浅隆“歴史学の動向と歴史博物館の展示”『教職・学芸員課程研究』vol.1, 2018, p. 71-83.
- 38) 福田珠己“ミュージアム再考: 視覚技術, 空間表現の視点から”『人文地理学会大会研究発表要旨』2015年人文地理学会大会. 2015, p. 120-121.
- 39) 小池淳一“東日本大震災と文化資源: 宮城県気仙沼市小々汐地区から”『国立歴史民俗博物館研究報告』vol.183, 2014, p. 169-186.
- 40) 齋藤克己“展示のコンポーネント(構成要素)”〈日本展示学会 [編] 『展示学事典』丸善出版, 2019〉p. 254.
- 41) *loc. cit.*
- 42) *loc. cit.*
- 43) 光岡, *op. cit.*, 2017, p. 12.
- 44) 堀池佳世子“双方向メディアとしてのミュージアム展示とコミュニケーション”『立教ビジネスデザイン研究』no.4, 2007, p. 245-260.
- 45) ちなみに, コミュニケーションという言葉自体は, 来館者同士の関係や, 展示物との関係においても見ることができる。前者は菅らの研究(類型1-3)(菅靖子ほか“インタラクティブな展示装置を中心とする鑑賞者の相互行為”『デザイン学研究』vol.49, no.5, 2003, p. 1-10.), 後者は橋本の研究(類型2-1)(橋本裕之“物質文化の劇場: 博物館におけるインタラクティブ・ミスコミュニケーション(物質文化研究の新たな可能性を求めて)”『民族学研究』vol.62, no.4, 1998, p. 537-562.)において見ることができる。
- 46) 山中, *op. cit.*, 2017, p. 67. 解釈という言葉自体は, 後述の展示解説と博物館職員の関係を表す言葉としても使われている。
- 47) 三橋, *op. cit.*, 2006, p. 96.
- 48) 今田, *op. cit.*, 2005, p. 83-151.
- 49) 落合, 中島, *op. cit.*, 2019, p. 99-110.
- 50) 落合, 中島, *op. cit.*, 2020, p. 33-46.
- 51) 梅棹忠夫『メディアとしての博物館』平凡社, 1987, p. 54.
- 52) 秋庭, *op. cit.*, 2012, p. 100-111.
- 53) 石田, 松田, *op. cit.*, 1997, p. 599.
- 54) 里見, *op. cit.*, 2014, p. 72.
- 55) 橋本, *op. cit.*, 1998, p. 544.
- 56) 里見, *op. cit.*, 2014, p. 72.
- 57) 秋庭, *op. cit.*, 2012, p. 102.
- 58) 奥村高明ほか“テート美術館「アートへの扉」理論の検討”『日本科学教育学会年会論文集』vol.38, 2014, p. 13.

- 59) 梅棹, *op. cit.*, 1987, p. 98.
- 60) 山中, *op. cit.*, 2017.
- 61) Ferguson. et al. *op. cit.*, 2002.
- 62) *Ibid.*, p. 2.
- 63) 山中, *op. cit.*, 2017.
- 64) 『博物館学事典』では、展示解説の一種である文字による解説の形態として、解説シートと解説パネルを例に挙げている (p. 230)。解説シートは“展示品もしくは展示の一部あるいは全体の構成などの解説が書かれた紙”で、解説パネルは“展示物や展示内容と見学者を結びつける媒体”である (いずれも『博物館学事典』(p. 44))。
- 65) 木下, *op. cit.*, p. 4.
- 66) 角丸四角形で囲まれた各概念を、関係を表す矢印で結んでいる。「展示物」と「展示解説」については、「展示」を構成する要素であることを明示するために点線で囲った。
- 67) 吉村浩一 “絵画に顕在するものを展示解説文に生かす意義” 『展示学』vol.50, 2012, p. 42-51.
- 68) 吉村浩一, 草刈清人, 廣澤公太郎 “展示解説に対する美術館と博物館の意識差: 展示専門家へのアンケート調査から” 『展示学』vol. 50, 2012, p. 122-123.
- 69) 吉村浩一, 関口洋美 “美術館と博物館の展示解説が相互に学ぶこと: 展示専門家へのインタビューに基づく展望” 『法政大学文学部紀要』vol.71, 2015, p. 91-112.
- 70) 吉村, 関口, *op. cit.*, 2013.
- 71) 有田寛之, 関口洋美 “国立科学博物館における子ども向け展示解説について” 『日本教育心理学会総会発表論文集』vol.47, 2005, p. 472.
- 72) 有田寛之, 関口洋美. “博物館展示解説における作成者の意図と来館者の印象の違い” 『日本教育心理学会総会発表論文集』vol.48, 2006, p. 151.
- 73) 佐々木英夫 “日本文化史展示の理解促進と年代観について: 博物館展示解説資料と「博物館弱者」への対応案” 『上智史學』vol.61, 2016, p. 39-46.
- 74) 吉村, *op. cit.*, 2012.
- 75) *Ibid.*, p. 42.
- 76) 吉村, 関口, *op. cit.*, 2013, p. 63.
- 77) 有田, 関口, *op. cit.*, 2005.
- 78) 有田, 関口, *op. cit.*, 2006.
- 79) 佐々木, *op. cit.*, 2016.
- 80) 神戸信和 “自然史系博物館における展示解説の役割と今後の方向” 『日本地質学会学術大会講演要旨』vol.1989, 1989, p. 717.
- 81) 吉村, *op. cit.*, 2012.
- 82) 有田, 関口, *op. cit.*, 2006.
- 83) 吉村, *op. cit.*, 2012.
- 84) 木下, *op. cit.*, p. 4.
- 85) Ferguson. et al. *op. cit.*, 2002, p. 1.

# **A review of studies about museum exhibition and museum labels, with analyzing relations between concepts appeared on the studies**

Miho KAYABA <sup>†</sup>

<sup>†</sup> Graduate School of Education, the University of Tokyo

This paper is a review of studies about museum exhibitions and studies about museum labels. The purpose of this paper is twofold: (1) to organize the perspectives from which museum exhibits and museum labels are studied, and (2) to organize the relationship between exhibits (or museum labels) and other concepts such as visitors. As a result, it was found that, first, studies about museum exhibits can be divided into three major types and eight smaller categories according to the perspective of the study, with many studies focusing on the relationship between exhibits and visitors. Second, as for the studies about museum labels, it was possible to apply the relationships found in the studies about museum exhibitions, and many of the studies focused on the relationship between exhibitions and visitors. Finally, throughout the review, I found no studies that focused on the relationship between exhibits and museum labels.

Keywords: Museum, Exhibition, Museum Labels, Review